

令和7年度 入学試験問題

国語

※試験開始のチャイムや合図があるまで開かないこと

〔注意事項〕

1. 問題用紙は、12ページまでである。
2. 解答は、すべて別紙の解答用紙の所定欄に記入すること。
3. 解答用紙への記入は、試験開始後に記入すること。
4. 解答用紙には出身中学校・受験番号・氏名を必ず記入すること。
5. 試験開始の30分後から退場はできるが、解答用紙は必ず裏返して退場すること。
6. 問題用紙は、各自で持ち帰ること。

常磐高等学校

次の文章を読んで、後の各問いに答えよ。句読点等は字数として数えること。

生まれ変わったら一度は相撲取りになってみたいし、新潮社の入社試験で書いた作文も相撲の立ち合いについてだったし、人生で初めて文学賞に応募した作品も相撲小説だった私が今気になっているのは、相撲の本場所での応援が、コンサートのアンコールみたいに变化してきたことである。「豪、栄、道」とか「稀勢、の、里」といったリズムで力士の名を呼びながら手拍子を打つのだ。このような応援の仕方はこれまでの大相撲の歴史には存在せず、相撲の応援といえ、ひいきの力士の名を館内によく響かせる声で叫ぶのが名物だった。声援は、集団ではなく個人単位だった。

数年前から沸き起こった相撲ブームとともにこの応援は発生し、広まっていき、定着しつつある。私みたいなそれ以前からの相撲ファンはたいてい眉をひそめているが、また、力士からも立ち合い前には集中が削がれるので静かにしてほしいとのお願いがあったりしているが、それはそれとして、時代とともに応援のスタイルなどその競技の文化が変化するのはありうることだろう。

(A) 変化には理由がある。私はそこが気になる。

毎場所、毎日、テレビの放映で手拍子を聞いているうち、私は何かに感触が似ているなと思った。やがて、はたと気づいた。サッカーの日本代表の試合後などに、渋谷のスクランブル交差点で見られるハイタッチである。私はあれを見るたびに、公共空間でも弾けてよいというお祭り騒ぎを、日本の人たちはすさまじく、渴望しているんだなと感じる。そして、寂しいんだな、とも。

ひとこと言えば、一体感に飢えているのだろう。一体感に飢えているのは、日常が孤独だからだろう。(B) 居場所がないのだ。あるいは、^①所属する場はあっても、そこに過不足なく自分が収まっていると思えないのだ。浮いている、外れている、はみ出している、蚊帳の外、いてもいなくても同じ、存在感がない、微妙に無視されている、つきあいは表面的で理解し合っているとはいいがたい。そんな疎外感を常日頃からどこかに抱えている。

(C) 非日常の場で、日常とはまったく違う人とのつながりを求めたくなる。力関係や利害関係から解放された、無礼講的な水平のつながりを。その機会の一つがスクランブル交差点でのハイタッチであり、大相撲観戦での手拍子であり、ハロウィンなのかもしれない。

それだけではない。昨年の安保法案反対のデモが盛り上がったのにも、その側面があると思う。昨今の政治の言説はしばしば、マイノリティを傷つける暴力性を帯びており、そのたびに傷つき、孤独感を募らせる人は多いだろう。私自身もそうだ。

それがデモに行けば、そのような言葉にこう^アうざしようという人たちがばかりだから、傷つかないという安心感があるし、孤独も癒される。まさに言葉の暴力で精神に重傷を負わされた人たちが何人も、それでも暴力を止めるという意志を露わにしている。同じ暴力を受けた当事者同士の関わりには、存在の根源を肯定し合える共感という、かけがえのない葉が含まれているだろう。

けれど、暴力を振るう側のデモや集会にも、おそらく同じ要素がある。暴力を楽しむために来ている者も少なくないだろうが、多くの人は最初は、孤独を癒す居場所を求めて、つまり（D）を満たしてくれる場として、ヘイトをする集まりに加わるのではないか。

そうして共同性を感じられる非日常の場に何度も参加するうち、それは非日常から次第に日常へと変わっていく。大相撲観戦だって、仮に毎場所毎日のように国技館へ通えば、それは日常になり、ちょっとした主^{あるじ}の気分になってくる。デモも、いつも参加するうち顔なじみができて、仲間となり友だちとなり、^③そこでこそ「本当の自分」を感じられるという居場所が変わっていく。

この感覚を否定することは、誰にもできない。私たちは、たとえそれが大自然とか動物相手であっても、何らかの所属意識を持たずには生かれないのだから。

（星野智幸『一瞬の共同性を生きる』による。一部改変）

（注）ヘイトスピーチ：差別的な言動。

カウンター行動：差別的な言動に対する抗議行動。

問一 本文中の（A）～（C）に入る語句として最も適当なものを、次の1～4の中からそれぞれ一つ選び、番号を書け。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|----|---|-----|
| 1 | だから | 2 | たとえば | 3 | でも | 4 | つまり |
|---|-----|---|------|---|----|---|-----|

問二 本文中の傍線部アに適切な漢字を当てるとき、傍線部アと同じ漢字を用いるものを、次の1～4の中から一つ選び、番号を書け。

- | | |
|---|-------------|
| 1 | こう堂に集まる。 |
| 2 | こう菌作用のマスク。 |
| 3 | こう域を支配する。 |
| 4 | 数学のこう式を覚える。 |

問三 本文中に傍線部①「所属する場はあっても、そこに過不足なく自分が収まっていると思えないのだ。」とあるが、それはなぜか。

その理由として最も適当なものを次の1～4の中から一つ選び、番号で書け。

- 1 場において、まわりに同調して同じような行動を取ることではか一体感を持つことができないから。
- 2 場においてしつくりかない感覚があり、自分が必要とされているという実感も持つことができないから。
- 3 場に必要とされている実感があり、自分らしく振る舞っているのに物足りなさを感じてしまうから。
- 4 場に求められている実感はあるものの、要求に十分に答えられていないことに焦りを感じているから。

問四 本文中の傍線部②「共同性の感覚」を言い換えた表現を、これより前の本文中から五字以内で探し、そのまま抜き出して書け。

問五 本文中の（ D ）に入る語句として最も適当なものを、次の1～4の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 自己顕示欲
- 2 承認欲求
- 3 保身欲
- 4 支配欲

問六 本文中に傍線部③「そこでこそ「本当の自分」を感じられる」とあるが、ここにある「本当の自分」を感じとっている者はどのような存在か。最も適当なものを次の1～4の中から一つ選び、番号で書け。

- 1 孤独を癒そうとする集まりに参加するうちに、自分も仲間と同じ疎外感を抱いていたことを自覚した存在。
- 2 力や利害で成り立っている関係から脱して、みずからの意志で発言し行動することができ存在。
- 3 無理に同調せずとも理解し合える関係の中でならば、自分という存在が適度に収まっていられると感じている存在。
- 4 日常の中でけっして表には出さないが、可能であれば公共の場でも弾けたい、意志を露わにしたいと思っている存在。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。句読点等は字数として数えること。

〔二トの浩弥（三十歳）は何者にもなれずにいた。浩弥は近所の小学校に併設されているコミュニティハウスの図書室へ行く。〕*

図書室に入ると、のぞみちゃんがこつと笑いかけてくれた。

室井さんの言うとおり、小町さんはいなかった。^{*}レファレンスコーナーのカウンターの端に、輪ゴムつきの『進化の記録』が置いてある。俺が来たら自由に取りれるように、そうしておいてくれたんだろう。

今日も利用者が少なく、静かだ。俺は閲覧席をひとりじめして本をゆっくりと開く。

太古の歴史、鳥類、変温動物。中ほどまできて、今は植物のページを読んでいる。ハエトリグサのみずみずしさに心を奪われつつ、ふと視線を感じて顔を上げると、貸出カウンターの中からのぞみちゃんが俺を見ていた。

え、と俺が目を開くと、のぞみちゃんはゆったりほほえむ。ドキっとして、照れ隠しであわてて言った。

「だめだよな、いい年して仕事もしないで、こんなところでハエトリグサなんか見てて」
「のぞみちゃんはこのこしながら首を横に振った。」

「ううん。浩弥さんを見ると、小学校の頃のことを思い出すんです。私、保健室登校だったから。少し違うかもしれないけど、なんかわかる」

保健室登校。のぞみちゃんが。

ちよつと驚いていると、彼女は続けた。

①「小町さんって、前はここの小学校で養護の先生をしていたんです。私はその時の生徒。一時的にですけど、どうしても教室に入れなくなつて、保健室登校しました」

そういえばのぞみちゃんは小町さんを「先生」って呼んでいる。司書としていろいろ教えてもらってるからかと思ってたけど、そういうことだったのか。

「……どうして、教室に入れなかったの？」

俺が訊ねると、のぞみちゃんは笑った。

「なんかね、みんなと同じようにできなくて」

ああ、それなら俺も一緒だ。

でも軽々しくそんなことを言っているのかわからなくて、俺はただうなずいた。

「私、大きな声がこわくて。小学生ぐらいの子って、突然大声出したり笑ったりするでしょう。他の子が先生に怒られたりするの、自分が責められてるようなつらい気持ちになったり、なんだかいつも、びくびくしてた。そういうのって、みんなビンカンじゃないですか。あいつは変な奴だとか、やりにくいとか。直接いじめられたとかいうより、なんとなくみんなに無視されてる感じで、自分がそこにいちゃいけないような気持ちになっちゃったんです」

明るい口調でのぞみちゃんは言った。

② だからなおさら伝わってくる。本当につらかったんだってこと。

「それで学校に行けなくなったとき、お母さんと担任の先生が話し合って保健室にいていいってことになったんだけど、最初の日に先生が……小町さんが、ぼそつと言ったんです。森永さんの夏休みの読書感想文、すごくおもしろかったよって。廊下の壁に何人か貼られているのを読んだんだって。嘘じゃなかった。ちゃんと、どこがどんなふうになかったか言ってくれたから。私、本当に嬉しくて、それから本を読んだら必ず感想文を書いて、小町さんに読んでもらっていました」

ずらりと並んだ本をゆくりと見回し、のぞみちゃんは穏やかに続けた。

「時間をかけて少しずつ教室に戻れるようになって。私が高校のときに小町さんはここで司書の仕事を始めたんだけど、卒業したら私も司書になりたいって相談したら、ここで司書補として働くことをススメてくれたんです」

「司書補？」

「はい。まず司書補講習を受けて、司書補として二年勤務すると、司書講習を受けることができます」

「えっ、司書の講習を受けるために二年の司書補経験が必要なの？」

「ええ、高卒の場合は。三か月の司書講習を受けて、通算三年以上の司書補経験を積んでやっと修了なんです。大学進学して必要な科目を取って資格取得するという道もあるけど、うちは経済的に進学は難しかったし、私もすぐに現場で働きたかったから」

意外に先が長いんだな。司書になるって大変なんだ。

俺は心から言った。

「そんな早いうちからやりたいことが決まって、まっすぐ進んでるっていいな」

「浩弥さんもそうだったんじゃないですか。高校を卒業したあと、デザイン学校に進んだんでしょう」

「でもぜんぜん、受け入れられなかったし。俺の絵、不気味で暗すぎるって」

のぞみちゃんは、かくんと首を傾けた。小町さんの仕草に、少し似ていた。

「えっと……えっと」

大きな目をきよろきよろ動かしながら、のぞみちゃんは何やらウンウンと考えている。そして突然、俺に向かって叫んだ。

「酢豚！」

「……え？」

「酢豚に入ってるパイナップルって、どう思います？」

なんだ、唐突に。

俺が首をかしげていると、のぞみちゃんは真っ赤の顔で一生懸命しゃべりだした。

「あれ、嫌がる人いっぱいいるじゃないですか。許せないと言われて。なのに、なんでなくなるのかなあって」

「な、なんでかな」

「**X** 派かもしれないけど、酢豚のパイナップルを好きな人はいて、その人たちはちょっと好きってレベルじゃなくて、ものすごい好きなんだと思うんです。好きの熱量の問題っていうか。たとえ **Y** に受け入れられないとしても、その人たちがいる限り **Z** が守られるんだと思うんです」

「……………」

「私は大好きです。酢豚のパイナップル。浩弥さんのあの絵も」

心がほわっとした。嬉しかった。こんなに必死になって、俺を励まそうとしてくれるのぞみちゃん。好きって、人を救ういい言葉だ。^③俺やあの絵の存在を受け入れられたって気持ちになる。たとえお世辞だとしても。

（青山美智子『お探し物は図書室まで』より 一部改変）

*コミュニティハウス＝小学校・中学校や既存施設を活用した地方公共団体の施設。生涯学習や地域活動など身近な場として、また学校と地域の交流や連携を深める場

*レファレンスコーナー＝図書館にある資料や機能を活用して、利用者の調べものや資料探しのお手伝いをするサービスやコーナー

問一 傍線部ア・イの片仮名を漢字に直せ、ただし送り仮名は平仮名で書け。

問二 傍線部①「小町さんって、前はここの小学校で養護の先生をしていたんです。」とあるが、小町さんの現在の職業を漢字で答えよ。

問三 傍線部②「だからなおさら伝わってくる。本当につらかったんだってこと。」とあるが、なぜ浩弥はつらいことだと感じたのか。

次の1～5の中から適当なものを一つ選び、番号で書け。

- 1 のぞみちゃんは浩弥とは違って、悩まず前に進んでいると感じ、元気をもらったから。
- 2 のぞみちゃんは浩弥とは違って、毎日楽しく過ごしてうらやましいと感じたから。
- 3 のぞみちゃんは浩弥と同じような思いをしているが、乗り越えてほしいと願っているから。
- 4 のぞみちゃんは浩弥と同じような思いをしていると感じ、思いが伝わってきたから。
- 5 のぞみちゃんは浩弥の思いに寄りそってくれたと思い、嬉しく感じたから。

問四 本文中の X・Y・Z にあてはまる適当な言葉を次の1～6の中からそれぞれ一つ選び、番号で書け。

- | | |
|------|------|
| 1 少数 | 4 存在 |
| 2 多数 | 5 賛成 |
| 3 人権 | 6 反対 |

問五 傍線部③に使われている修辞法を漢字三字で書け。

問六 本文から読みとれる浩弥とのぞみちゃん的心情の説明として適当なものを次の1～4の中から一つ選び、番号で書け。

- 1 浩弥を心配しているのぞみちゃんの気持ちを、敬語を多用した文体から読みとることができる。
- 2 少し気が晴れた浩弥の気持ちを、体の感覚についての表現から読みとることができる。
- 3 だんだんとすれ違っていく浩弥とのぞみちゃんの気持ちを、会話文から読みとることができる。
- 4 すっかり明るくなったのぞみちゃんの気持ちを、回想している部分から読みとることができる。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。句読点等は字数として数えること。

※ 博雅の三位さんみの家に、盗人A入りたりけり。三品さんぽん、板敷いたじきの下に逃げ隠れにけり。盗人帰り、さて後、這はひ出でて家の中を見るに、残りたる物なく、みな取りイてけり。筆簾ひらりき一つを置物おきもの厨子に残したりけるを、三位取りて吹かれたりけるを、出でて去りぬる盗人、はるかにこれ①を聞きて、感情おさへがたくして帰り来たりて言ふやう、ただ今の御筆簾の音を承るに、あはれに尊まうく候まちひて、悪心③みなあらたまりぬ。取るところの物ども、ことごとくに返し奉るたてまつべしと言④ひて、みな置エきて出でにけり。

昔の（ ）は、またかく優なる心もありけり。

（『古今著聞集』による。一部改変）

※博雅の三位…源博雅（九一八—九八〇）三位は官職名。後の三品と同じ意味。

※板敷…縁側。

※筆簾…竹製の縦笛。

※置物厨子…物を載せて置くための戸棚。

問一 波線部 A・B の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 二重傍線部 ア・エ の中で主語の異なるものはどれか。記号で答えよ。

問三 傍線部 ①「これ」は、何を指すか。本文中より五字で抜き出せ。

問四 傍線部 ②「感情おさへがたくして」とあるが、どのような感情か。本文中より六字で抜き出せ。

問五 傍線部③「悪心」とあるが、どのような心か。適当なものを次の1～4の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 博雅が三位になったことに対する嫉妬の心。
- 2 大した収穫にならなかったことを残念に思う心。
- 3 物事の善悪の判断に迷う心。
- 4 他人の物を我が物にしたいと思う自分勝手な心。

問六 傍線部④「言ひ」とあるが、発言はどこからどこまでか。初めと終わりをそれぞれ四字で答えよ。

問七 文中の（ ）に適当な言葉を補え。

問八 本文では、博雅の三位はどのような人物として描かれているか。適当なものを次の1～4の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 あわて者であると同時に、臆病な人物。
- 2 ささいなことには動じない、豪快な人物。
- 3 判断が的確で、とっさの機転がきく人物。
- 4 笛を愛し、その演奏が非常にすぐれた人物。

四

次の漢文を読んで、後の問いに答えよ。句読点等は字数として数えること。

【本文】

宋^ニ有^リ狙^ニ公^{ナル}者^一。愛^②狙^モ、養^ニ之^ヲ成^ル群^一。能^ク解^シ狙^ニ之^ヲ意^ヲ、狙^モ亦^ニ得^{タリ}公^ノ心^ヲ。損^ジ其^ノ家^ヲ口^ヲ、充^ツ狙^ニ之^ヲ欲^ニ。俄^{カニシテ}而^ニ置^シ焉^一。将^ニ限^{ラント}其^ノ食^ヲ。恐^ル衆狙^ニ之^ヲ不^レ馴^{ラシコトヲ}於^ニ己^ニ也^一、先^ヅ誑^{キテ}之^ヲ曰^{ハク}、「与^{フルニ}若^ニ茅^ヲ、朝^ニ三^{ニシテ}而^ニ暮^{レニ}四^{ニセバ}、足^ル乎^ト。」衆狙^ニ皆^ニ起^{チテ}而^ニ怒^ル。俄^{カニシテ}而^ニ曰^{ハク}、「与^{フルニ}若^ニ茅^ヲ、朝^ニ四^{ニシテ}而^ニ暮^{レニ}三^{ニセバ}、足^ル乎^ト。」衆狙^ニ皆^ニ伏^{シテ}而^ニ喜^ブ。

（『列子』による。一部改変。）

【書き下し文】

【A】狙^Bを愛し、之を養ひて群れを成す。能く狙の意を解し、狙も亦公の心を得たり。其の家口を損じ、狙の欲に充つ。俄かにして置し。将に其の食を限らんとす。衆狙の己に馴れざらんことを恐るるや、先づ之を誑きて曰はく、「若に茅を与ふるに、朝に三にして暮れに四にせば、足るか。」と。衆狙皆起ちて怒る。俄かにして曰はく、「若に茅を与ふるに、朝に四にして暮れに三にせば、足るか。」と。衆狙皆伏して喜ぶ。

（注） 1 狙公…猿を飼っている人に付けられた呼び名。

2 狙…猿のこと。

【現代語訳】

宋の国に狙公という者がいた。(狙公は)猿をかわいがり、(飼っている猿は)群れをなしていた。(狙公は)猿の気持ちを理解することができ、猿も同様に狙公の心を理解することができた。(狙公は)自分の家族の食料を少なくしてまでも、猿の食欲を満たしていた。急に(狙公は)貧乏になった。(そこで)餌を制限しようとした。(しかし)猿たちが自分に懐かなくなるのを心配して、先に猿をだまして言った。「おまえたちにどんぐりをやるのに、朝に三つ夕方に四つにしたら、足りるかな。」と。猿たちはみな立ち上がって怒った。(そこで狙公は)早速言った、「おまえたちにどんぐりをやるのに、朝に四つ夕方に三つにしたら、足りるかな。」と。猿たちはみなひれ伏して喜んだ。

問一 傍線部①を参考に空欄Aに入る書き下し文を書け。

問二 傍線部②について、傍線部Bを参考に、返り点をつけよ。(送り仮名は不要)

問三 傍線部Xの読み方を現代仮名遣いで平仮名で答えよ。

問四 次の□の中は、本文を読んだ高城さんと山田さんが、会話をしている場面である。

高城さん この話の中で狙公は猿をだまして餌を減らすことに成功しているけれど、狙公の傍線部③の発言にはどういう意図があったのかな。

山田さん 猿たちを納得させるためにまず先に「ア」意図があったと思うよ。

高城さん なるほど。では、最後に猿たちが喜んでいたのはなぜだろうか。

山田さん 猿たちは「イ」と思ったからだね。

高城さん 狙公の思い通りになったわけだね。

(1) 「ア」に入る発言として最も適当なものを次の1～4の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 朝の餌の量が少ないことを猿たちに気づかせる
- 2 夕方の餌の量が多いことを猿たちに気づかせる
- 3 朝の餌の量が少ないことを猿たちに隠す
- 4 夕方の餌の量が多いことを猿たちに隠す

(2) 「イ」に入る発言として最も適当なものを次の1～4の中から一つ選び、番号を書け。

- 1 夕方よりも朝のほうが多く食べられてうれしい
- 2 狙公と仲直りできてうれしい
- 3 どんぐりの数を増やしてくれてうれしい
- 4 どんぐりの数が変わらなくてうれしい

問五 この話から「朝三暮四」という故事成語ができたが、次の中からその意味として最も適当なものを一つ選び、番号を書け。

- 1 時にはあきらめが必要であるということ。
- 2 多数の者の意見を取り入れることが大切だということ。
- 3 人を口先でうまくごまかすこと。
- 4 相手の言うことをそのまま受け入れること。